岡山県立大学短期大学部研究紀要　第11巻（2004）

触覚に着目した造形表現の研究

関﨑　哲

A Study of the Formative Expression Based on Tactile Sensation

Satoshi SEKIZAKI

要約

今日、造形教育の場における絵画表現への取り組みは、造形活動で扱う素材の多様化やパソコンなど二次的な描画道具の導入によって様変わりしている。そして本来、造形表現の基本であるべき描画活動に対する取り組みが減っていることは、大きな問題であり、このような状況から表れてくる絵画作品は、絵を描いた本人の感じているリアリティーを伴わないもの、表現する欲求の弱いものが多く見られるようになってきた。

本研究は、このような現状を改善するため、本学学生や保育士、小学生など、様々な対象に向けて実施した“触ってみる絵”製作の取り組みを報告するとともに、絵画表現の中における触覚や他の感覚の重要性について考察したものである。

キーワード：造形表現、幼児造形、触覚

1. はじめに

今日、造形教育の場における絵画表現への取り組みは、造形活動で扱う素材の多様化やパソコンなど二次的な描画道具の導入によって様変わりしている。その結果、そこから表れてくる絵画作品は、絵を描いた本人の感じているリアリティーを伴わないものが増えているように思われてならない。本人が“もの”に実際の触れ、表現の技術的な問題よりも重要であるべき“表現する欲求”が伴っていないものがとても多いのである。これだけ世の中に多様な視覚的表現が存在し、様々な手法で絵や映像のやり取りが行われていながら、そこで表現されているものは、視覚のみでとらえられたものがほとんどである。このような視覚というものに片寄った今日の状況が、少なからず先に述べたような昨今の絵画表現の問題と関連していると考えざるをえない。

本研究は、この造形教育、特に絵画表現の現状を踏まえ、実感（リアリティー）溢れる個性豊かな絵画作品を生み出すような取り組みができないかと考え、ここ数年取り組んでいる「触ってみる絵」をテーマにしたワークショップの活動を報告し、考察を行うことを目的とした。

2. 問題の所在

絵画で表現するための描画活動は、目の前にある“もの”によってなんらかの感情が動き、その動

きを他人に伝えようとする、人間が本来持つ欲求によるものである。このような、“もの”を見、何かを感じ、描き、感情の動きを人に伝えようとする行為は、現代のように様々な情報伝達の方法が用いられる状況であっても、非常に重い意味を持つものであると考える。特に、幼児教育や初等教育に携わる者にとって、描画活動にかかわるこのような問題は、真剣に考え取り組んで行かなければならないことなのではないだろうか。しかし、現実に目を向けると、小・中学校といった義務教育や、保育園・幼稚園といった幼児教育の中で行われる造形活動において、その重要性に見合う描写（広い意味で、いわゆる絵を描くこと）の活動が乏しくなっているいように思われてならない。造形遊びに代表されるような、材料体験や単純な制作活動の楽しさを経験できるような活動に対する反省から、最近は、鑑賞活動の重要性が見直されつつあり、様々な角度からの鑑賞教育の方法が試みられている。しかしながら、このように多様化する造形教育のなかにあって、最も根本的で大切なことであるべき描画活動はますますその比重が軽くなる一方のような気がする。

本学児童福祉専攻の学生の描画活動の様子や作品を見ても、ここで述べたような問題は、顕著に見ることができる。描写力や技術的な絵の善し悪しと言うことではない。描く本人の気持ちが伝わるような素朴な表現を、ほとんど見ることができないのである。イラストや漫画的なものは非常に器用にに描き出しているのであるが、実際に目の前にある“もの”としっかり向かい合った描写表現となると、取り組む機会も少なく、いざ描こうとしても、どうしたらよいのか見当もつかなくなってしまう状態をよく見かける。

このような状況を引き起こす原因として考えられることは、「彼等が外から受ける情報」が視覚に片寄ったものとなっているということである。何かを描く場合、描き表わすために必要な情報は、視覚で得られたものだけでは不十分なのである。実際に自分の目の前に“もの”を置いたところを想像していただきたい。その“もの”から受けるリアルな印象というものは、視覚だけから得られるものではない。自分自身を尺度とした対象となるもののスケール感、テクスチャー（手触り）、温度、匂い、息づかいなど、人間の持つ五感すべてを働かせ、対象となるものからの情報を受けることができなければ、それを見た時の感情の動きを人に伝えることなどできるはずはないのである。ましてや、ものを見て心を動かされるということすら経験できないかも知れない。

本論で報告する取り組みは、このような描画活動についての問題を、触覚を意識させることで改善できないかというねらいによって試みたものである。個性的で素朴な、おおらかな描画活動を目的としながらも、ここで報告する活動は描画活動と言えるものではない。しかし、現段階では、視覚に片寄った対象を見つめる目に、触覚と言う感覚を加えることで、“もの”を見ることで心が動くと言うことを、経験させることから始めてみようと考えたのである。

次章では、そのような問題意識を持ちながら実施した、「触ってみる絵」をテーマとした造形活動の実践事例を報告する。

表1　「触ってみる絵」ワークショップ実施内容

実施日時・場所	平成13年5月24/31日・6月7日 （90分3コマ） 本学短期大学部内図画工作実習室	平成14年3月10/17日 （90分2コマ） 本学短期大学部内図画工作実習室	平成15年5月24日 （2時間＋作品展示1週間） 岡山県立美術館研修室・常設展示室
ねらい	・造形表現の上での触覚の重要性を再確認する ・手触りから連想される感覚の他人との共通性を理解する	・造形表現の上での触覚の重要性を再確認する ・手触りから連想される感覚の他人との共通性を理解する ・幼児造形に使用する素材について改めて考えてみる	・造形表現の上での触感の重要性を鑑賞、制作の両側面から体験する ・手触りから連想される感覚の他人との共通点と相違点を見つける
対象・参加者	本学児童福祉専攻2年次生・50名	保育士（本学卒業生）・22名	小学生以上・19名 内訳：小学生10名、中学生3名 大人6名
制作形態・サイズ	各グループ5名による共同制作 全紙（841×1, 189mm）	個人制作 A2判（420×594mm）	個人制作 F6（318×410mm）
使用材料	基底材：3mm厚マット紙 接着剤：速乾性木工ボンド 砂、石、木、葉、紙類、布類、ひも毛糸、綿、廃材等	基底材：3mm厚マット紙 接着剤：速乾性木工ボンド 砂、石、木、葉、紙類、布類、ひも毛糸、綿、廃材等	基底材：2mm厚シナベニヤ 接着剤：速乾性木工ボンド サンドペーパー、木、葉、紙類、布類、ひも、毛糸、綿、廃材等
活動内容	1コマ目：導入、制作テーマの検討 2コマ目：制作 3コマ目：制作、 題名表現意図記入、展示	1コマ目：導入、制作テーマの検討 2コマ目：制作、題名表現意図記入 巡回提示による鑑賞	＊表2参照

3. 実施したカリキュラムおよびワークショップの実践報告

これまで「触ってみる絵」のテーマにより行った活動を、表1にまとめた。平成13年の最初の取り組みから3回、各々、対象や目的、制作形態も替えながら実施してきた。その実践の様子を、以下に詳しく報告する。

（1）本学児童福祉専攻の「図画工作」における“触ってみる絵”の取り組み

表1にあるとおり、最初の取り組みは、平成13年の5月から6月にかけて、本学児童福祉専攻2年次生50名を対象とし、「図画工作」の授業の中で行った。（写真1・2・3）全紙大のマット紙に、学生5名による共同制作で、3コマの授業時間を費やした。1コマ目は導入として、目をつぶっていろいろなものを触ることから始めた。触ったものが何か当てさせたり、どんな感じがするものなのか、直接ものの名前を言わずに抽象的な言葉で他の学生に説明させることを行った。そして制作は、作品についてグループ内での意志の疎通を図るため、まず簡単なワークシートを作る事から始めた。ワークシートには、表現したいものの描写を行わせた。表現したいものの性格やそのキャラクターの周囲の環境など、まず言葉で表してからそれを触覚に置き換え、更に具体的な手触りを持つ素材名に対応させた。2・3コマ目は、実制作に入る。各々ワークシートに基づいて材料を集め、協力しながら作品の完成を目指す。メンバー全員が納得する作品の完成を確認し、題名と表現意図を書いたカードを添付し、壁面に展示した。

（2）保育ステップアップ講座の中での“触ってみる絵”の取り組み

2回目は、平成14年に実施した「保育ステップアップ講座」（本学児童福祉専攻が主催する保育や幼児教育に携わる者を対象に行う総合講座で、この平成14年は、本学卒業生で保育・幼児教育に携わっている者を対象に行われた）で、対象を保育・幼児教育に携わっている者（卒業生）25名として行った。（写真4・5・6）今回は個人制作とし、2コマかけての活動とした。各参加者にA4判のマット紙を配付し、それをベースにして作品を作ることにした。1コマ目は、導入と制作テーマの

写真1　「触ってみる絵」学生による共同制作

写真2　作品部分　土、草、石、スチロールトレイ等

写真3　作品部分　砂、貝殻、エアーキャップ等

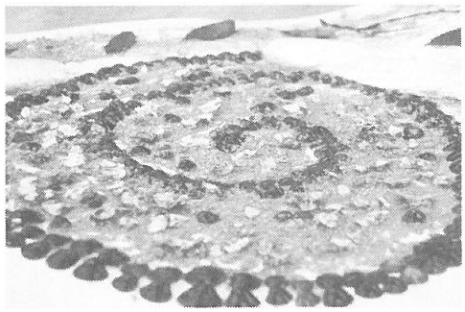


写真4　「触ってみる絵」保育士による制作

写真5　制作過程　綿、砂、木工ボンド

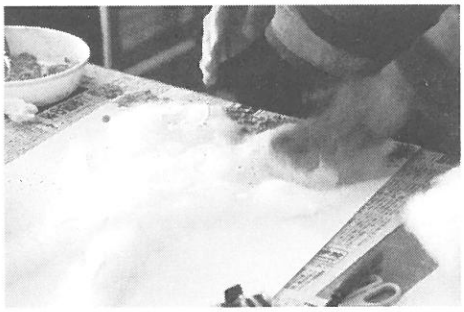
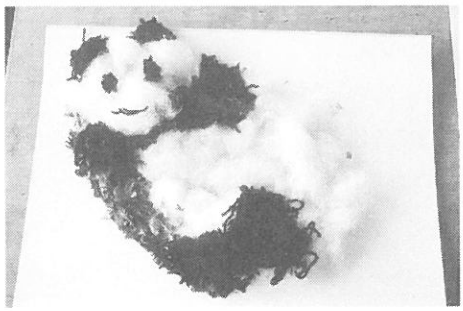


写真6　作品「森に暮らすパンダ」



検討に当てた。対象が保育・幼児教育に携わっている者であることもあり、子どもの表現における触覚の重要性や視覚と触覚の違いについて、触覚に基づいた表現が現れている子どもたちの作品をスライドで見ながら一緒に考えてみた。ここでも、最初の導入は、目をつぶっていろいろなものを触ること、そしてその手触りから受ける抽象的なイメージを言葉で現わすということを行った。実際の制作に入る前のワークシート記入には、前回と同じように、表現したいものの描写を行わせ、触覚に置き換え、具体的な手触りを持つ素材名に対応させた。2コマ目は、ワークシートをもとに集めてきた材料を使い、実制作を行った。展示して鑑賞する時間がとれないため、今回は制作中に教室を回り、作品を掲げて制作者の発言を引き出しながら、少しでも多く、他の人の制作の様子を見てもらうように心掛けた。

（3）美術館でのワークショップとしての“触ってみる絵”の取り組み

3回目は、美術館でのワークショップとして実施した。対象は一般（小学生以上）20名で、F6大のベニヤパネルに個人制作をすることにした。今回は、美術館で実施するということもあり、美術館収蔵の作品の鑑賞を「導入」に積極的に利用すること、制作後の作品を一定期間展示し、きちんとした形でお互いの鑑賞する機会をつくることを考えた。

活動の詳細は、表2で示すとおり、導入から作品完成まで2時間、そして1週間の展示を行うというものである。実際の活動では、参加者が小学生から40歳代の大人まで多岐にわたることを考慮し、予め表3のような“制作のためのヒント”を印刷して配付し、活動内容を誰もが理解しやすくなるようにした。ここでも、最初の導入は、目をつぶっていろいろなものを触ること、そしてその手触りから受ける抽象的なイメージを言葉で現わすということを行った。（写真7）更にその後、活動の場が美術館であることを利用し、美術館常設展示室で、絵と触覚の話をしながら作品の鑑賞を行った。ごつごつした岩肌を描いた絵など、触覚の再現を主題とした作品や、絵画自体の表面の質感に特徴のある作品に注目させたり、霧が立ちこめる水墨画を見ながら、その絵に表現されている湿気や温度、風などを想像してみるという活動を行った。（写真8）制作室に戻っ

表2　県立美術館でのワークショップ活動の流れ

	時間・場所	活動内容
1. 導入①	2003.5.24 1:00～1:20 研修室	・目をつぶっていろいろなものに触ってみる 箱を用意し様々なものをその中に入れ、触った感想を言ってもらうことで、触覚に意識を集中させる
2. 導入②	同日 1:20～1:40 常設展示室	・美術館の中の作品を触覚という観点から鑑賞する 絵が表している物の質感、温度、湿り気等、視覚以外の感覚を働かせて絵を味わい、より実感を伴った鑑賞の方法を経験する
3. 導入③	同日 1:40～2:00 研修室	・言葉（表現したいこと）と手触りの関係を考えてみる 用意したワークシートを手がかりに、言葉（表現したいこと）と具体的な素材とを関連付ける
4. 制作	同日 2:00～2:45 研修室	・制作 準備したいろいろな素材を実際に触りながら、自分のイメージに近い物をさがし、貼り付け作品の制作をすすめていく
5. 片付け	同日 2:45～3:00 研修室	・まとめ 題名と作品解説をプレートに記入しながらお互いの作品を触ったりながめたりしてみる
6. 展示	2003.5.24 ～6.1 屋内広場	・展示 作品に題名開設のプレートをはりつけ、壁面に取り付け「触ってみる絵」の解説と制作風景のパネルを掲示 展示期間終了後作品は制作者に返還

表3　制作のためのワークシート

さわってみる絵を作るためのヒント

それは、
どんなせいかく ＿＿＿＿＿＿＿＿

それをてざわりであらわすと ＿＿＿＿＿＿＿＿

それをざいりょうであらわすと ＿＿＿＿＿＿＿＿

どこにすんでるの ＿＿＿＿＿＿＿＿

すきなものはなに ＿＿＿＿＿＿＿＿

とくいなことはなに ＿＿＿＿＿＿＿＿

写真7　美術館でのワークショップ　導入の場面①

写真8　導入の場面②

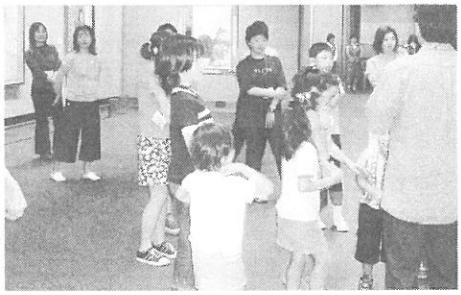


写真9　制作のための材料

写真10　制作の様子

写真11　作品「ふしぎな富士山」（小学4年生）

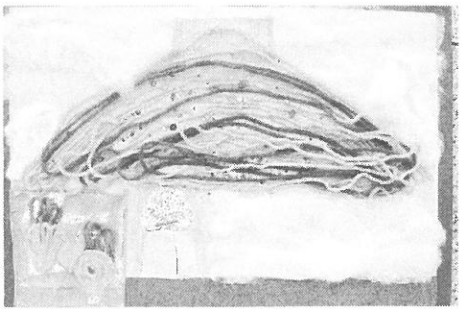
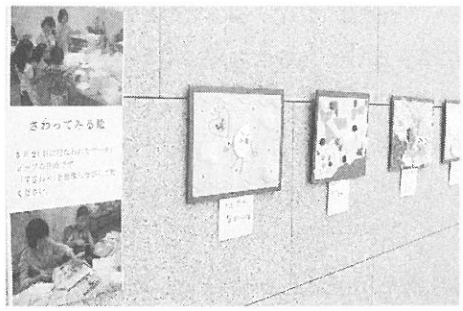


写真12　美術館での展示発表



てからは、各々の制作のために、“制作のためのヒント”を参考にしながら表現するものを考え、準備した材料を実際にに触って自分の表したいものを具体化し、使う材料を絞り込み、実制作を行った。(写真9・10)完成した作品には、題名と簡単なコメントを記入したカードを添えて乾燥させ、翌日からほぼ1週間、美術館のホールに展示した。(写真11・12)

4.　考察

今回報告した活動の内容は、描画活動についての問題をテーマにしておきながら、直接描くと言う活動を行っているわけではない。扱った素材や出来上がった作品だけを見たならば、描画するということとは程遠い活動のように思われるかも知れない。しかし、視覚に片寄った対象を見つめる目を自覚し、触覚と言う感覚を意識しながら“もの”を見ることで、描画活動につながる、“ものを見ることで心が動く”と言う表現のための最初のきっかけを与えようというねらいを理解していただきたい。

本論の最初でも触れているが、造形表現することの基本は“描くこと”である。しかしそこで、描くことの指導を行おうとする場合、描写の技術的な問題に指導の重点が置かれがちで、このことが、指導される側の“描画嫌い”を引き起こす原因になってしまうことが多い。このような事態を招かないためにも、まず描写技術を問うような指導ではなく、まず“もの”を見て心を動かされるという経験をさせたうえで、その感情の動きを人に伝えたいと言う表現の欲求を生み出させることが必要だと考える。なによりも、描画活動は、目の前にあるものによってなんらかの感情が動き、その動きを他人に伝えようとする、気

持ちが起らない限り始まらないものなのである。

報告した取り組みでは、表現したいと考えたものに対して、抽象的な描写する形のない言葉を選ぶように課題の設定を行った。「優しい」「恐い」といった言葉は固定された形はないものの、人間すべてに共通のイメージというものが存在する。表現するための描写技術を問わなくても、表現したいものの総合的な感覚による理解と、しっかりした人に伝えたいと言う欲求があれば、このような共通感覚を媒介として、個人の思いはきちんと表現され、人に伝わっていくものなのである。このようにして“触ってみる絵”では、様々な素材を用いて表現を楽しみ、その表現したことが人に伝わっていく喜びを経験することができる活動だと思う。

このワークショップに参加した人たちが、どう考えるかはともかく、この活動を企画し実践した者の立場から言えば、“触ってみる絵”は、様々な素材を用いて“描くこと”の体験であり、描くためには、視覚だけによるのではなく、自分自身が持つ五感すべてを働かせて“もの”を見なければならないことに気付くきっかけになるものだと考えている。また、よく見ることで起る“自分自身の感情の動き”をしっかり自覚するための活動であるとも考える。

今後は、この取り組みを経験した人たちの、“描く”と言う行為が、“触ってみる絵”の活動をする以前と後とどう変わるか、きちんと検証する必要があると考えている。そして、“触ってみる絵”の活動の他にも、感じたことを自分なりの方法で描き出す、個性的で素朴な描画活動につながって行くような方法を考えていく必要があると思っている。

5. 終わりに

造形教育の方法は、素材との出合いの体験や制作活動の楽しさを経験できるような造形遊びから、これまでの方法にとらわれない新しい形式の鑑賞教育に至るまで多岐にわたっている。しかし、「造形」というものに親しむための“入り口”はたくさんある方が良いとは言え、単に素材に触れるだけの造形遊びや、描き表わされたものの表面的なことを眺めるだけの鑑賞活動には、疑問を感じる点も多い。そして、本来、造形表現の基本であるべき描画活動に対する取り組みが減って行くことはもっと大きな問題である。

今回のこの「触ってみる絵」への取り組みが、描画活動の新しい入り口となって、描画活動が楽しいことであるという状況をつくり出す一つの契機となればよいと考えている。

参考文献

1) ウド・リーベルト：『芸術あそび』、日本文教出版、1996
2) 中村雄二郎：『共通感覚論』、岩波書店、1979
3) 後藤雅宣：「造形における触覚教育」、『筑波大学芸術研究報10』、筑波大学芸術学系、1990

2003年10月31日受付
2003年12月25日受理